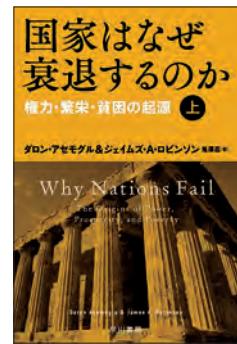


『国家はなぜ衰退するのか 権力・繁栄・貧困の起源（上）（下）』

ダロン・アセモグル&ジェイムズ・A・ロビンソン（著）
鬼澤 忍（訳）

食料領域 主任研究官 若松 宏樹



2024年のノーベル経済学賞は本書の著者が受賞しました。受賞理由は制度と創造的破壊を伴う技術革新が、古今東西の経済発展の要因となることを解明したことです。またその翌年も創造的破壊を通じた経済成長の理論的な解明をした研究がノーベル経済学賞を受賞しています。本書に関するブックレビューは、2015年7月号で樋口主任研究官がすでに執筆していますが、このように10年以上前に書かれた本書が再び脚光を浴びているため、改めてブックレビューに本書を取り上げたいと思います。

本書の始まりは米国とメキシコの国境の町、ノガレス。米国側だけがはるかに発展しています。壁を隔てただけで環境は全く同じなのに、なぜでしょうか？ 結論はシンプルで、制度の違い。包括的な制度は繁栄を、収奪的な制度は衰退をもたらします。近世に南米はスペインによって収奪的な制度を敷かれ、搾取されたことをご存じの方も多いでしょう。収奪的な制度はそれを敷いた権力者がたとえ打倒されても新しい権力者が新たな収奪的制度を敷く、という「寡頭制の罠」から抜け出せず、メキシコも例に漏れず現代までその影響が残っています。一方、北米は当時収奪する資源がなく、英国から遅れてきた入植者はそれぞれ自ら産業を発展させました。そのため包括的な制度が形成され、繁栄へつながりました。それらを象徴する状況が冒頭のノガレスなのです。制度が包括的か収奪的かどうかは「創造的破壊」の運命を決定づけ、発展への道筋を分けます。この創造的破壊は、収奪的制度下では既得権益層（王侯貴族など）が変革を恐れて封じ込め、経済は停滞します。逆に包括的制度下では阻止できず、変革が促進され経済は発展します。

制度の転換は、しばしば疫病など歴史的イベント時に発生し、ある社会では包括的制度への転換を促す一方、別の社会では収奪的制度を強化します。既存の権力構造の僅かな条件の差が、やがて大きな発展の差へつながります。偶然ある条件が重なった時、例えば支配者の権力が絶対ではなく、権力は複数により保たれ、統率者がいる時、収奪的制度は包括的制度に切り替わることがあります。本書は明治

維新や英國の名誉革命、フランス革命などの成功例や、逆に制度の転換により経済衰退へ向かった例（ローマ帝国など）などを、制度と創造的破壊の観点から紹介します。

米国の発展は先に述べたとおりで、現在まで危なげなく経済発展を続いているように見えますが、包括的制度から収奪的制度に移る危機もありました。例えば創造的破壊の結果、鉄道や鉄鋼や石油で富を築いた大富豪が収奪的な経済制度を敷こうとした時です。この時は包括的制度の下、市民の反対運動と民主的政治により独禁法を生み出し、権力集中は抑制され、収奪的制度への転換は阻止されました。創造的破壊からくる発展の成功は、資金や技術の移転そのものより、民主的グループに力を与え、社会が自律的に制度改革を行える環境を整えることに起因すると著者は指摘します。しかし、今米国は包括的な制度を続けるのか、収奪的な制度に転換し衰退していくのか、その岐路に立っています。

また、日本の最近の経済停滞を本書の枠組みから理解することも可能かもしれません。日本は包括的制度のため収奪的に何かを搾取するということは起こりにくい仕組みです。しかし、創造的破壊についてはどうでしょうか。新たな産業の芽となる創造的破壊を伴う技術革新は、既得権益層から、産業保護として締め出す傾向にあるように思われます。この結果、偶発的に起こった創造的破壊は権益に食い込むことができず締め出されることが多いのではないかと思います。その場合、政府は我が国の発展のため、産業を保護すると同時に、創造的破壊を促すという、バランスの取れた制度づくりが求められていると言えます。

本書は、包括・収奪的制度と創造的破壊が及ぼす影響を、歴史的事例を挙げて繰り返し説明しており、直感的に理解しやすいので、是非お手に取られることをお勧めします。

『国家はなぜ衰退するのか—権力・繁栄・貧困の起源』著者／ダロン・アセモグル&ジェイムズ・A・ロビンソン
翻訳／鬼澤 忍
出版年／2013年
発行所／早川書房